

# 息の合った歌唱と

## 「凝縮」の演出

第19回みつなかなオペラ

「マリア・ストゥアルダ」

### オペラ評

川西市・みつなかなホールを舞台にした「みつなかなオペラ」が今年、上演したのはドニゼッティの「マリア・ストゥアルダ」。ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、みつなかなオペラ合唱団と、指揮・牧村邦彦、演出・井原広樹らのスタッフがこれまでの蓄積を生かし、凝縮の舞台を作り上げた。物語の背景には16世紀後半のイングランドとスコットランド、その後にあるフランス、さらにカトリックとそれからの自立を図るイギリス国教会の対立な

どがある。イギリスの女王エリザベス(エリザベッタ)の命でスコットランドの女王メアリー(マリア・ストゥアルダ)が斬首されるというドロドロした宮廷暗闘劇だが、オペラ(F・シラーの原作をG・バルダーリが台本化)ではそれを愛と嫉妬の苦悩を軸に展開するドラマに構成、オペラにもってこいの物語に変容されている。

自分への刑の不当を強く訴えるマリア・ストゥアルダ(尾崎比佐子)と、彼女の死刑執行令状への署名で苦悩するエリザベッタ(並河寿美)がドラマの中心。その周辺にはエリザベッタ



撮影：仲野達也

に「署名」を迫る廷臣セシル卿(花月真)に対し、マリアの恩赦を必死に働き掛けるレスター伯ロベルト(松本薫平)がいる。レスター伯とマリアは互いに思いを抱く一方、エリザベッタもレスター伯に思いを寄せている。この構図に、マリアを擁護する穏健な廷臣タールボット卿(雁木悟)や、マリアの侍女アンナ(白石優子)が絡む。この一見、錯綜した関係を井原演出は「対立」を強調した配置で手際よく整理した。

簡潔で構成舞台風な装置(アントニオ・マストロマッティ)の効果もあって、特に第1幕第2場「フォレルینگ城」では左側にエリザベッタとセシルやその手勢、右側にはマリアとレスター伯、その手勢が立ち、互いに対立する主張を歌って凄絶なドラマを展開。第2幕第2場では自分の死を受け入れるマリアを中心にまさに「浄化」を作り出したが、その第2場ではマリア側の「この処刑はイギリスにとって拭い去ることのできない恥」との非難に対し、エリザベッタ側は「これでイギリスの敵はいなくなる」と歌う。カタルシスは壊され、その対立は解消されないまま幕となる。強い印象を受けるのはこの現代劇風の結末もあるが、凝縮した演出や、歌手陣が彫りの深い確な歌唱で舞台を引き締めたこと、さらにこのホールに見合った響きを巧みに作り出したオーケストラの息の合った作業なども成果の大きな要因だろう。

(9月19日、みつなかなホール)  
(嶋田邦雄)